

---

# ころしや

妄六里矢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ころしや

### 【コード】

N0981F

### 【作者名】

妄六里矢

### 【あらすじ】

殺し屋は不可解な高揚感を感じながら標的を待っていた

早朝、殺し屋は民家の屋根の上に這いつくばり、標的を待っていた。

「そろそろか」

口の中で呟いてマルボロをくわえた。仕事の前にはいつもそうしていた。

殺し屋は完璧主義者だった。標的を二カ月前から観察してその特徴、性格、嗜好、行動パターンを頭に叩き込んだ。そして哀れな子羊はまもなく毎朝のジヨギングでここを通りかかるはずだった。

ふと殺し屋は、自らの背中をそつと抱く高揚感に気づいた。らしくもない。いつ何時も冷静沈着でいられるのが取り柄なのに、どうしたというのか。

腕時計をのぞくと、予定の時間の三分ほど前だった。

この不可解な昂ぶりは、仕事を終えれば解決するはずだ。そういい聞かせて、そのときを待った。今日に限って、時間はなかなか進んでくれない。

やがて時計の数字は、予定時刻をゆっくりと通り過ぎた。殺し屋にはその三分間が何時間にも感じられた。やはり今日の自分はおかしい。緊張しているともいうのか。

五分が過ぎた。

「おそいな」

殺し屋は腕時計が狂っているのではないかと疑ったが、その時計は電波時計だった。

十分が過ぎた。

「まさかやつの子になにかあったのでは」

眼下の道を人が通り過ぎるたび、標的ではないかと心躍らせ、人違いだとわかるたび、落胆した。

十五分が過ぎた。

「いくらなんでもおそすぎる！」

家まで様子を見に行こうと腰を上げたそのとき、見慣れた青のジヨギングウェアに身を包んだ青年が現れた。

殺し屋は胸の高鳴りが最高潮に達するのを感じながら、くわえていたマルボロを投げ捨てた。火は点けていなかった。未成年だからだ。音もなく道に降り立つと、青年の死角から一気に詰め寄り、人体胸の急所・水月に指を突き立て、青年が悲鳴を上げるより早くこういつた。

「おそい！」

青年は驚いて一瞬固まり、突然現れた見知らぬ少女を凝視した。

「いったいなにしてたのよ！ どれだけ心配したと思ってるの、馬鹿！」

「えっと」青年は混乱する頭で恐るべき適応能力を発揮し、機械的に相手の言語を解析して会話をつなげることに成功した。「寝坊しちゃって」

「そんな理由にならないわよ！ もう、どうして今日に限って寝坊なんかするわけ？」

「ごめんなさい」

殺し屋はわれにかえると、耳まで真っ赤に染めて顔を背けた。

「ぶ、無事ならそれでいいの」

「え？」

「ああ、もう、とにかく！」少女は背中を向けたままいった。「明日もここに居るから、おくれるんじゃないわよ！」

「あ、はい」

「いつもあなたのこと、見てるんだからね！」

少女は人間にあるまじき跳躍力で民家の塀の上に飛び乗ると、屋根の向こうへ消えた。

(後書き)

なんじゃこりゃあ  
あああ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0981f/>

---

ころしや

2010年12月4日18時46分発行